報告

# シンガポールでの季節感と伝統行事

冨田裕香
（シンガポール在住・元大学職員）

お茶の水女子大学附属いずみナーサリーは、温かなまなざしを向けてくださる先生方と小さな子どもたちが作り上げていく大きな安心感とぬくもりのある空間で、このすてきな建物のドアを開けるのは、ナーサリーでの一日が始まる朝の楽しみでした。ここで娘と息子はそれぞれ生後6か月から娘は2016年3月まで、息子は2017年3月までお世話になりました。

その後、先に海外赴任生活を始めていた夫と共にシンガポールで暮らし始めたのは2017年の秋のことです。

日本からの長旅の飛行機から降りて、真っ先に感じたのは、もわっとした湿気と暑さです。日本ではそろそろ本格的な冬を前に厚手のコートが必要になろうかという頃でしたので、シンガポールにやって来たことをまず肌で感じることとなりました。

常夏の国シンガポールでは、一年を通して気温は30度前後です。乾季と雨季はあるもののそう大きく変わらず、朝は涼しくとも数時間もすればカンカン照りで、時折激しい雨が降ることもあれど、すぐに止む。天気予報を見る習慣などなくても、天気といえば、そのようなものに決まっています。細やかに服装を調整する必要もなく、毎日半袖の服を着る生活です。日の出と日の入りでさえ年間を通してほぼ同じで、午

冨田裕香（とみた ひろか）
2017年3月までお茶の水女子大学グローバル教育センター（現国際教育センター）にて勤務。
現在はシンガポールにて、3児の母として子育て中。

前6時半から7時頃にだんだん明るくなり、午後7時から7時半の間にすっかり暗くなります。日本とシンガポールの時差は1時間ですが、こんなことからも赤道直下に住んでいることを感じます。

このような生活は、時計いらずで便利ではありますが、一方で、まだ子どもたちがナーサリーに通っていた頃のような、日の入り時刻に季節を感じて一年が過ぎていった日々が懐かしく思い出されます。ナーサリーの前の一本道で、日が明るいうちにはアリやダンゴムシを探すのに付き合いながら、すっかり日が暮れた後には黄色く輝く月を見上げながら家路に就いたものでした。

シンガポールで生活を始め、すぐに一年の最後の月になりました。その頃に感じていた、はっきりとはよくわからない物足りなさの原因、それは「寒さ」でした。12月だというのに、ちっとも寒くありません。こんな代わり映えしない生活があと何年も続くのはとても長く感じたものです。冬なのに、暑くてまるで夏バテのように感じるのは、なんともあべこべです。日本で暮らしてきた中で深く染み込んでいる「季節感」というものを、こんなにも感じたことはありません。

日本では、年の瀬といえば、冷たい空気がほおにピリッと感じる、そういうものではないでしょうか。まさに、『枕草子』の「冬はつとめて」です。「いと寒きに、火などを急ぎおこして、炭持て渡るもいとつきづきし」と聞けばその情景が浮かび、『徒然草』の「春はやがて夏の気を催し、夏より既に秋は通ひ、秋はすなわち寒くなり、十月は小春の天気」と聞けば、日本の四季の移り変わりとはまったくその通りと感じるものではないでしょうか。

そして、新しい年を迎えるにあたって日本人に必要な要素、それは「厳かさ」ではないか、と年越しを祝う盛大な花火の音を聞きながら思いました。このようなシンガポールで感じる日本との違いを、子どもたちはどのように受けと

めているのでしょうか。

シンガポールには日本人も多いですし、日系スーパーをはじめ、日本のお店も多いので、案外、生活上の不便さを感じることは少ないです。ただ、子どもたちが日本の季節感というものを十分に実感できないまま大きくなることは、少なからず気がかりではあります。日本にいれば当たり前に目にする季節の花、旬の野菜や果物、魚、虫、鳥の名前も、できるだけ知っていてほしいと思っています。

一方で、日本の生活様式や日本で暮らして感じることが必ずしも世界共通のものではなく、異なる常識が共存しているという認識をもつことも、子どもたちにとって意味のあるものであってほしいと思います。

例えば、日本の新年度は4月ですが、シンガポールでは1月から始まります。また、中華系、マレー系、インド系から成る多民族国家であるため、食文化も多彩で、街中の至る所でこれらの料理を口にすることができます。英語を使う場面が多いですが、北京語、マレー語、タミル語も公用語で、駅や電車内などではこれらの4言語での表記や放送があります。

子どもたちの幼稚園では、先生も子どもたちも英語を話しますが、英語母語話者に合わせるということではなく、クラスの共通語としてという認識です。さまざまな国籍、母語が異なる子どもたちが同じクラスにいますが、お互いの母語がわからなくても、お互いが英語を話せれば会話をすることができます。このような環境で、日本語を母語とする、非英語母語話者である子どもたちが、英語を学ぶ意味を感じ取ってくれるとうれしく思います。

そもそも、シンガポールでは人口の7割以上を占める中華系住民にとっては、カレンダー上の1月1日よりも旧正月（春節）のほうが新年の始まりを意味します。チャイニーズニューイヤーは最も盛大な祝日のひとつに挙げられ、チャイナタウンを中心にこの時期はとても華やかな雰囲気に包まれます。多宗教の国らしく、シン

ガポールには、仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教の宗教行事に関連した祝日が多く、季節の移り変わりを感じることは難しくとも、これらを通して月日の流れを感じることができます。

文化的アイデンティティーをもち、文化を受け継ぎ伝え、尊重する思いは、日本もシンガポールも通じるものがあるように思います。

新年の祝い方ひとつをとってもさまざまで、子どもたちも春節や、光の祭典とも呼ばれるヒンドゥー教のお正月にあたるディーパバリのときは、チャイナタウンやリトルインディアで購入した民族衣装を着て幼稚園へ行き、伝統的なお菓子を食べたり歌を歌ったりしました。シンガポールに住むことがなければ、このような機会も得られなかっただろうと思います。

同様に、浴衣や甚平を着て、日本の外で、日本のお正月や桃の節句、端午の節句、七夕やお月見といった日本の伝統行事を体感することも、日本人としては貴重な経験だと思います。例えば、シンガポールでは中秋節も大きなイベントですが、日本のお月見と似ているかといえば、お団子ではなく月餅を食べますし、街中では色とりどりのランタンが飾られ、やはり趣が異なるからです。

子どもたちの幼稚園でも、思い思いのカラフルな手作りランタンを制作しましたが、毎年のことですので、前年の作品のことも思い出されます。お月見の制作活動というと、娘がナーサリーに通っていた頃、お月様の上にお団子を貼り、お月様に一つ食べさせてあげたことを表現したというエピソードもかわいらしく、今も印象に残っています。他にも、今年はどんなこいのぼりを作ったのかな、どんなお願い事を短冊に書いたのかな、とわが子の作品やそれにまつわるエピソードに思いをはせることは、親の楽しみでもあります。制作活動を通して育まれた感性、心の癒しの記憶もまた、受け継がれていくのではと感じます。